

# 関東大震災と「復興小学校」 ―学校建築にみる新教育思想―

小林 正泰  
勁草書房 2012年12月刊

## || 目 次 ||

### 序章 本書の課題と先行研究

- 第1節 研究課題の設定
- 第2節 先行研究の批判的検討
- 第3節 本研究の構成

### 第1章 震災前における東京の小学校

- 第1節 都市教育の諸問題
- 第2節 東京市の小学校建築

### 第2章 震災による被害と学校の復興

- 第1節 関東大震災による被害
- 第2節 復興事業の概要

### 第3章 復興小学校のプランとその実際

- 第1節 復興小学校の建築プランと行政的基盤
- 第2節 統一設計による学校の規格化
- 第3節 データにみる復興小学校
- まとめ

### 第4章 錦華小学校の事例

- はじめに
- 第1節 学校沿革と復興の過程
- 第2節 校舎・設備の教育的機能
- 第3節 地域社会による復興後援会の活動
- まとめ

### 第5章 練屏小学校の事例 その1 ―地域社会との関係を中心に

- はじめに
- 第1節 地域社会と学校の震災復興
- 第2節 区画整理と校地拡張
- 第3節 地域による校地拡張運動と記念事業後援会
- 第4節 地域社会の学校利用
- まとめ



### 第6章 練屏小学校の事例 その2 ―教育実践との関係を中心に

- はじめに
- 第1節 復興校舎の概要
- 第2節 学校側の校舎設計および設備への要求
- 第3節 学校建築への教員の関与と研究体制
- 第4節 教育実践の組織化と学校環境の構成
- まとめ

### 第7章 大正・昭和初期における学校建築をめぐる諸思想

- はじめに
- 第1節 古茂田甲午郎の学校建築観とその思想的背景
- 第2節 私立新学校の学校建築像とRC校舎への批判
- 第3節 木下竹次のオープンスクール論
- まとめ

### 終章 「復興小学校」研究の意義と今後の課題

- 第1節 本研究から得られた知見
- 第2節 復興小学校の教育学的評価―オープンスクール論との対比をもとに
- 第3節 今後の研究課題と学校建築研究の意義

### 補論 これからの学校建築を考える

## ■本書の課題と得られた知見■

- ・復興小学校を教育学の観点から分析する＝新たな復興小学校像の提示
- ・大正・昭和初期という大きな社会変動の中に復興小学校を位置づける
- ・学校を「開く」ということの教育学的検証—現代のオープンスクールとの対比

### 1. 新教育思想の社会的広がり

1. 新教育思想の社会的広がり
2. 社会変動期における多様な社会的要求が学校建築に反映
3. 学校建築史の通説を相対化

### 1. 新教育思想の社会的広がり

- ・新教育とは？—教師中心の受動的教育から、子ども中心の能動的で活動的な学習への転換を図る  
教育の思想および実践。新教育実践校を「新学校」と呼ぶ。
- ・東京市側：東京市政関係者の新教育的学校観  
e.g. 古茂田甲午郎をはじめとする建築局員の児童中心主義的学校建築観  
佐野利器の教育観と新教育思想との親和性、大正デモクラシーの影響  
古茂田や川本宇之介（東京市政調査会）らに対するアメリカ新教育の影響
- ・学校側：現場教員による学校建築への関わり→そこへの新教育の影響  
e.g. 錦華小一校長の新教育的学校建築観  
練屏小一教壇廃止、廊下の博物館化、気象観測室

### 2. 社会変動期における多様な社会的要求が学校建築に反映

- ・学校建築の規格化・RC化  
—建築学（耐震耐火建築への要求）および東京市政（二部教授の解消）の立場から
- ・新教育への対応＝理科・手工・図画教室、学校園、学校博物館等
- ・社会教育の中心機関としての小学校＝講堂、裁縫室、可動間仕切り、電灯、附設小公園  
↑大衆社会化、新たな階層（新中間層・労働者階級）の勃興、1925年男子普選
- ・環境悪化に対する衛生設備＝水洗便所、衛生室、シャワーバス、日光浴室、校地緑化
- ・戦間期の重化学工業化に対する科学・手工教育への要求＝理科・手工教室とその設備

### 3. 学校建築史の通説を相対化

- ・学校建築の教育的機能化 Cf.上記の1, 2  
—行政側（「総てが教育的に機能」する学校）、学校側の両方向から
- ・地域の中心としての小学校  
—社会教育からの要請による学校の地域開放  
—学校後援会等地域諸団体に支えられ、利用される学校  
—小学区制下における地域住民の統合（階層間の融和）
- ・学校を「開く」萌芽（オープンスクールとの思想的類似性）

## 序章 本研究の課題と先行研究

### 【研究課題の設定】

- ・教育環境への関心の高まり⇔附属池田小事件—安全性の確保→監視化・閉塞感  
→学ぶ環境として相応しい建築のあり方 その論点として学校を「開く」ということ  
戦後のオープンスクール＝内外に学校を「開く」ことによる環境改革→学校改革  
…批判対象としての画一的RC校舎—その基点としての復興小学校
- ・しかし、復興小学校の研究は不十分→RC校舎の原初形態を確認する

### 【先行研究の批判的検討】

- ・学校建築史における通説の検討  
(1) 戦前の学校建築には教育(学)的配慮がされていない  
(2) 戦前の学校は「開かれていない」—外部利用を禁止して地域と断絶した  
(3) 戦前の学校建築は画一的である  
…個別の実証研究が十分に蓄積されていないのにこれらの通説は妥当と判断できるのか？  
→復興小学校を素材に、(1)(2)の観点を中心として検証する
- ・復興小学校に関する研究  
佐野をめぐるエピソード（作法室など） } 合理主義・科学主義  
特別教室と近代設備（電器・ガス・水洗便所） }  
小公園との関係 —コミュニティの中心施設  
…しかし、全体像（平面計画・諸設備や建設計画）が不明／教育学的分析の不足（古茂田の思想含む）／個別学校の研究も不足

## 第1章 震災前における東京の小学校

### ★震災前の小学校・学校建築の状況を把握する

- 変動する社会状況を背景に、学校建築に多様な要求が寄せられる

### 【都市教育の諸問題と学校建築】

- ・様々な都市問題＝人口急増/環境悪化/都市災害の頻発/大衆社会化
- ・人口流入＋自然増による人口増加/就学率上昇/義務年限延長  
→児童数の増加・二部教授＝学校の増設・収容力増大 →校舎のRC化
- ・環境悪化・都市災害→都市計画の必要性 ⇒建築学会による基準作り・RC化  
→児童の教育環境への着目 ⇒衛生設備・校地緑化
- ・大衆社会化・普選の実施→社会教育の必要性 ⇒学校の地域開放・講堂の重要性

### 【地域社会の学校利用】

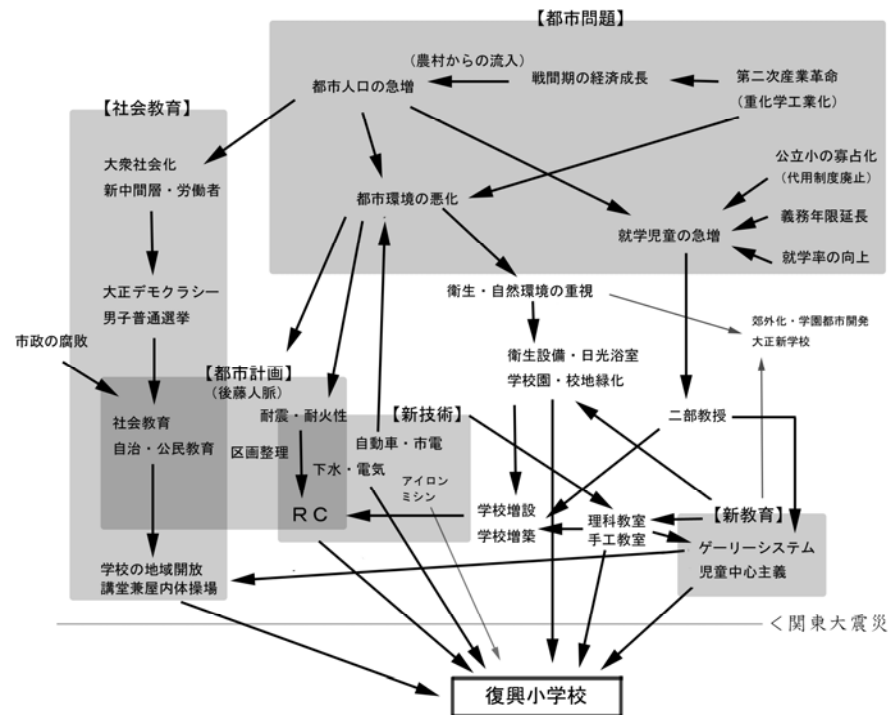
- ・小学校令第30条＝教育目的外利用の禁止→学校利用の規制緩和・普選での利用
- ・文部省社会教育課の「教育の社会化」＝学校中心の社会教育→学校の地域開放

**【東京市域小学校の構造転換】**

- ・公立小学校の増設・増築+私立小学校の衰退+通学区域の設定  
→小学区制の下で、地域の中心としての学校（階層間の融和、地域統合）
- ・近世的私立小の衰退の一方で、新しい教育理念に基づく私立「新学校」の登場

**【東京市の小学校建築】**

- ・明治期の小学校建築 —洋風の公立小と寺子屋式の私立小、不定形な学校建築  
→設備準則による規格化・画一化を図るも法規制を断念（地方財政への配慮）
- ・小学校建築費補給規程の制定—市が区へ建設費補給、学政統一との関係  
※全校 RC 化の方針は震災前年の大正 11 年、後藤新平市政下の補給規程改正にて
- ・東京市学校建築取締規則案と大正 6 年の風水害→建築学会の学校建築への関与  
=佐野利器など震災復興事業推進者（後藤人脈=東京市政調査会）の関わり

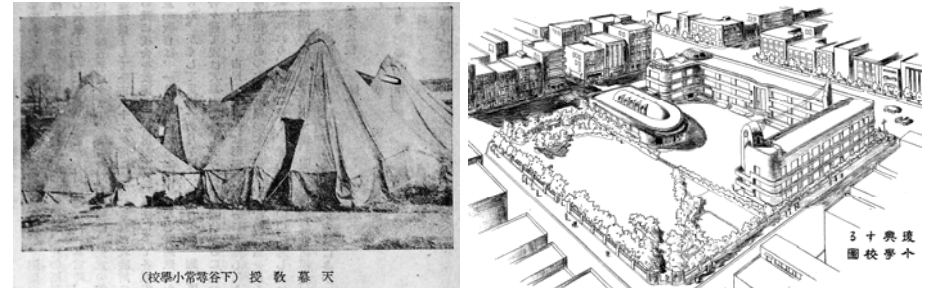


**第2章 震災による被害と学校の復興**

★震災による被害状況と復興計画の概要を確認する

**【関東大震災による被害】**

- ・火災による被害の拡大→ほとんどが木造校舎であったため、市内 196 校中 117 校が焼失
- ・震災復旧期の学校・教員の役割=避難所・救護所としての学校→要耐久性、学校の求心力
- ・授業再開以降の教育環境…露天学校→天幕学校→仮校舎→本校舎（RC 造）



出典：(左) 東京市役所『東京市教育復興誌』／(右) 東京市復興総務部編『東京市帝都復興事業概要』

**【復興事業の概要】**

- ・帝都復興計画の経過と概要—後藤新平が掲げた理想と挫折  
→帝都復興院から国・府・市の分業体制へ（小学校建設事業は市の管轄）
- ・東京市における復興計画策定の過程 =東京市役所各部局、復興委員会の役割
- ・復興小学校の事業計画—全校 RC 化、教室数=震災による焼失数+二部教授の解消、区の事業への建設費全額補給、東京市（建築局）による統一設計

**第3章 復興小学校のプランとその実際**

★復興小学校に込められた教育的機能を設計プランから析出し、データ分析と対照させる  
→1) 学校建築の教育的機能化、2) 地域の中心としての小学校 という性格

**【復興小学校建設計画とその行政的基盤】**

- ・復興小学校の概要—近代的諸設備、衛生・校地緑化への配慮、講堂・小公園の位置
- ・設計主体をめぐる争い—学務局と建築局の対立（作法室・水洗便所・暖房・理科教室）  
建築局主導の設計に対する校長会の懸念と対案=教育観の相違

**【復興小学校の規格・構造】**

- ・「単位」の発想→普通教室（および特別教室）の規格・定型化、事業・費用の効率化

- ・教室の設備—普通教室：1F 校庭側の出入口（活動的学習観）、廊下側の壁面構造（教室内ブレイバシーの確保）、教室間の可動間仕切り（中講堂の利用）／廊下の多機能性（画廊・遊び場等）／理科教室の優遇・充実した設備 etc.
- ・講堂兼屋内運動場—講堂としての利用を優先、多目的社会教育施設として地域に開放

#### 【復興小学校のデータ分析】

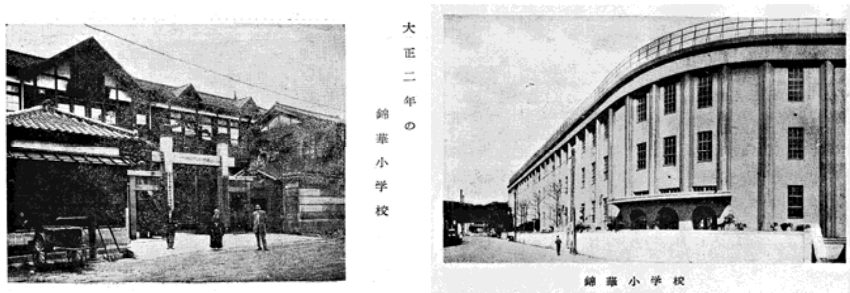
- ・復興小学校の基本データ＝学校規模／施工費用・日数および施工業者／特別教室の室数・構成／校舎型・付設小公園
- 校地面積などの制約条件により、理想とする全てのプランが実現したわけではないが、1) 学校建築の教育的機能化、2) 地域の中心としての小学校という性格が概ね実現

### 第4章 錦華小学校の事例

★第3章で析出された二つの性格の妥当性を個別学校の事例で検証する。

#### 【学校沿革と復興の過程】

- ・錦華小学校の沿革—創立当初の華族学校の性格、大正新教育の影響（手工・図画・綴方）
- ・被災から復興まで—先行研究で不明な学校建設の過程が判明  
学校側への意見聴取＝学校建築に対する教員の関与



出典：『錦華 創立八十年記念誌』1954年

#### 【校舎・設備の教育的機能】

- ・復興校舎の基本構造—過去の校舎との比較→簡素な「ハコ」から徐々に充実・拡大化
- ・内部設備の教育的分析—特別教室の翼端配置、1F 教室校庭側の扉、教室間の扉、児童図書室、廊下の画廊機能、活動写真、学校園、小公園、校舎型・方角、屋外体操場、屋内体操場（昇降口・便所の位置）  
⇒学校建築の新教育的要素 Cf.校長の学校建築観↓
- ・利用者による学校建築の認識  
—児童：理科教室・広い校地など新校舎の新設備に着目⇔震災後の劣悪な教育環境  
Cf.波多野完治・永井龍男が感じた「間借り」校舎の惨めさ＝木造校舎の不安定性

—校長：新教育的教育実践に適合的な復興小学校 ←校長自身の視察旅行  
「凡てに、大に児童の発動的研究学習設備を営むには好都合」

#### 【地域社会による復興後援会の活動】

- ・復興後援会の事業内容…地域社会全体からの募金で、不足する教育設備を購入
- ・教育実践を支える地域社会—保護者会、青年団等地域諸団体とのつながり  
⇒地域の中心としての小学校

### 第5章 練屏小学校の事例 その1 —地域社会との関係を中心に

★第3章で析出された二つの性格のうち、2) 地域の中心としての小学校という特徴の妥当性を個別学校の事例で検証する。→地域社会に支えられ、利用される小学校

#### 【地域社会と学校】

- ・学校の沿革—地域社会によって設立され、地域の学校として育ってきた。交通の要所
- ・復興の過程—学校復興に尽力する地域社会（校地拡張運動と記念事業後援会）

#### 【区画整理と校地拡張】

- ・校地拡張運動—市当局より16学級案が提示されたことを契機に（震災前は19学級）
- ・学校側の意見—震災前の学級数・校地面積を大幅に下回することは許されない。しかし、江戸時代からの繁華街であった同地では広い敷地が確保できない  
→二長町移転を決意（通信省厩舎跡地）

#### 【地域による校地拡張運動と記念事業後援会】

- ・校地拡張実行委員会の活動→児童保護会長を中心に区画整理事業に介入、当局へ要望書の提出、自ら校地購入も検討
- ・記念事業後援会の活動—錦華小の復興後援会と同様に地域からの募金で設備購入

#### 【地域社会の学校利用】

- ・地域社会と学校の関係—学校を中心に諸団体を編成：保護者会/校友会/青年団/夜学校
- ・地域団体の学校利用—上記諸団体により利用される→それに適合的な建築

### 第6章 練屏小学校の事例 その2 —教育実践との関係を中心に

★第3章で析出された二つの性格のうち、1) 学校建築の教育的機能化という特徴の妥当性を個別学校の事例で検証する。→教員自身の学校建築への関わり、新教育の影響

### 【復興校舎の概要】

- ・学校建築の変遷—児童数の増加に伴って拡大、諸設備も充実化
- ・復興校舎の構造—校舎型＝ほぼ四方を囲む「不適切」な構造（敷地の狭さ）／東京市の方針に概ね沿った教室・設備／気象観測室／学校園・植樹 etc.
- ・復興校舎の内部設備と備品

### 【学校側の校舎設計および設備への要求】

- ・校長らの設計図（平面計画）作成—市当局と交渉しつつ教員自ら関与（市と現場の共同作業）
- ・学校側の建築設計変更希望＝計4回 23項目  
e.g. 理科・手工準備室の学校博物館化、教壇廃止（児童中心主義の観点による）
- ・設備・備品費補給への要望  
—気象観測室兼開放室＝衛生や観測だけでなく地理学習・図画・読書等に利用する多目的スペース  
…一方で、作法室設置の要望も

### 【学校建築への教員の関与と研究体制】

- ・教員による設備・備品研究—教室・設備ごとに分担して研究・立案→設計や備品への要望
- ・学校建築研究のための情報収集—設計図や備品カタログの収集、他校参観

### 【教育実践の組織化】

- ・校内での教育・研究の組織化＋教育雑誌の購読—学校建築研究を実施する組織的基盤  
…一方で、多数の学校管理規程による学校空間の管理・規律化（挙式規程、秩序規程等）
- ・練屏小の教育方針—学校教育方針・各教科教授方針・校長の教育観に見られる、新教育的要素と忠君愛国思想の混在

## 第7章 大正・昭和初期における学校建築をめぐる諸思想

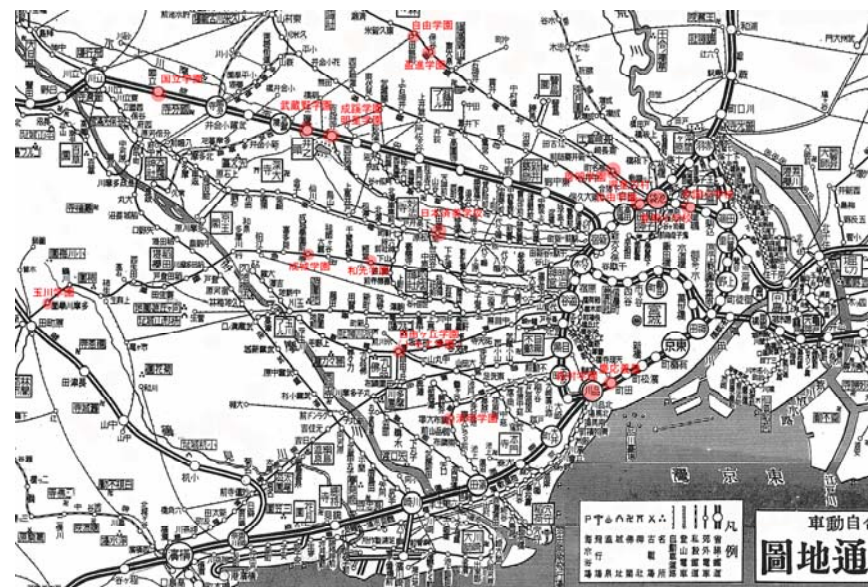
★復興小学校の諸機能に込められた背景思想を読み解くと同時に、RC校舎への批判を内在させた「大正新学校」の学校建築・環境論を分析する。

### 【古茂田甲午郎の学校建築観とその思想的背景】

- ・古茂田甲午郎の経歴—佐野利器からの影響／学生時代からの公共建築への関心／古茂田の著作が及ぼした学校建築研究への多大な影響
- ・教育と建築の関係性—質素・堅牢・衛生＋新教育（とくにゲーリーシステム）
- ・佐野利器の建築観と教育観  
—近代合理主義・機能主義→学校建築の教育的機能化（「総てが教育的」な学校建築）  
「地域公共の中心建築物」→都市における「公德」の育成、啓蒙的教育観（子どもを通じた科学・衛生思想の普及）
- ・ゲーリーシステム＝校舎の「複用」と地域開放（とくに講堂）⇒二部教授撤廃＋新教育

### 【大正新学校における理想的学校建築像とRC校舎への批判】

- ・私立新学校の学校建築と学園都市開発  
—「新学校」は自然環境・家庭的環境を求めて郊外に立地しつつ（下図）、RC校舎を批判  
…しかし、復興小学校にも様々な制約がありながらも同様の思想が含まれている
- ・木下竹次のオープンスクール論：「学習生活学校」⇔「座学学校」  
→公立小の制約を踏まえた新しい学校建築論を展開—教室を外に開き、学校を外に開く  
＝戦後のオープンスクールとの共通点。しかしそれも「未発の契機」に。



出典：伊藤恒夫『最新大東京全図』昭興堂書店、1934年より作成

## 終章 「復興小学校」研究の意義と今後の課題

### 【本論からの考察】

- (1) 学校建築の教育的機能化
- (2) 地域社会の中心としての小学校
  - 建築・教育実践・地域社会の三者関係＝子どもをとりまく環境としての学校建築
  - それに影響を与える外部の社会・経済的環境、あるいは政治・政策
  - 社会変動期における多様な社会的要求が学校建築に反映

### 【オープンスクール運動について】

- ・ 1980年代以降、学校を「開く」動きが活発化。オープンスクールの進展
- ・ オープンスクール論が批判した既成の学校建築
  - ＝ 学校の閉鎖性と画一性、教育的配慮の欠如—紋切り型のプランニング
  - ↑ 1950「鉄筋コンクリートの標準設計」(文部省が建築学会に委嘱) ← 復興小学校からの影響
- ・ 学校を「開く」とはどのようなことか？ オープンスクール論の思想的系譜を検証
  - 児童中心主義、経験主義、活動主義 → 戦前期新教育運動との連続性

### 【復興小学校における教育環境の構成】

- ・ 学校を「開く」というモチーフの萌芽—オープンスクールと同様の＜新教育の地平＞
  - 内部のオープン化：学校園、1階普通教室側庭側の扉、廊下の多目的教育機能、教室間の可動式間仕切り、多目的スペースの設置
  - 外部へのオープン化：学校施設の外部利用、附設小公園
  - …とくに校舎・設備の複用を通じた多機能化・効率的利用の効果
  - つまり、学校建築の複用で多機能性が高まり、学校が内外へ開かれた
- ・ 一方で、天皇制国家体制の影響（奉安庫・神社等、地域に「開く」負の側面→総力戦体制）、学校建築画一化の起点、現代からみて十分学校が開かれていない、といった限界も

### 【今後の研究課題と学校建築研究の意義】

- ・ 復興小学校の「新しさ」およびその後の学校建築に対する規定性を精査する
  - 他地域との比較、前後の時代との比較、人々の受け止め方 etc.
- ・ 学校建築＝教育に対する社会的諸要求が「モノ」として実体化する場
  - 学校建築研究における教育学的視点の必要性